

04 共同研究会「万国博覧会と人間の歴史」から考える

佐野真由子

2010年度に始めた小さな研究会「万国博覧会と東アジア——共同研究の可能性を探る」から、翌年度のシンポジウム「万国博覧会とアジア——上海から上海へ、そしてその先へ」が生まれた。そこに参加してくださった方々の熱意に押されるようにして、2012年度に共同研究会「万国博覧会とアジア」を立ち上げ、2013年度からは3年計画の「万国博覧会と人間の歴史——アジアを中心に」に移行、ここまでの成果を、25編の論文からなる『万国博覧会と人間の歴史』（佐野編、思文閣出版、2015年10月、計758頁）にまとめた。そして2016年度より再び3ヵ年の計画で、「万国博覧会と人間の歴史」がスタートしたところである。

当研究会を紹介する機会をいただいたことを光栄に思いつつも、迷いがあった。なぜなら、この研究会を遂行してくるなかでの一つの重要な関心はつねに、「日本研究を脱する」ことにあったからである。ほかでもない「日本研究」をテーマとする本誌には、ふさわしくないのではなからうか——。それでも、むしろそこにこそ日本研究を考える鍵があるかもしれないと考えて、小文を認めてみることにしたい。

1. 万博研究は日本研究なのか？

19世紀半ば、世界を一望のもとに収める未曾有の催しとして実施されるようになった万国博覧会——欧米先進国の事業として始まり、1970年大阪万博で初めてアジアでの開催が実現し、近年では2010年上海万博を筆頭として、アジアの広域で展開されるようになった——は、あらためて言うまでもなく、国際的な営みである。にもかかわらず、そこに「日本研究を脱する」という課題が浮上する背景には、日本における既存の万博研究が、この国際的事業を相手にしながら、「日本」を研究するものでありすぎたという背景がある。

日本で万国博覧会という素材が著述の対象として注目されるようになったのは、上記の1970年大阪万博開催前後からのことである。同万博自体の計画に着目したジャーナリズム記事等が先行したが、万博史を振り返る本格的な学術研究としてこのテーマに先鞭をつけたのは、京都大学人文科学研究所の科学技術史家、吉

田光邦教授であった。その成果は1985年から翌年にかけて、吉田の単著である『万国博覧会——技術文明史的に』（日本放送出版協会）、吉田が多彩なメンバーを率いて行った共同研究会の論集『万国博覧会の研究』（吉田編、思文閣出版）、ならびに『図説万国博覧会史——1851-1942』（同）として世に送り出された。

吉田の研究はけっして日本関連の事象のみを扱ったものではないが、歴史上の万国博覧会に日本が参加してきた経緯、その様相を描き出すことに一つの重点が置かれ、刊行物においても多くの頁が割かれているのは、日本における最初の万博研究としてごく自然なことであったと言えるだろう。実際、明治維新後の新政府が国際社会に日本という存在を位置づけていく努力のなかで、1873年ウィーン博、1876年フィラデルフィア博、1878年パリ博……と連続開催された万博を、世界への窓としていかに重視し、それへの参加を政治上の重要課題と見て取り組んだかを想起するだけでも、日本における万博研究が日本の万博参加の歩みに光を当てることに、疑問を呈する余地はない。

ただし、日本の参加に関して吉田光邦とその研究会による一連の成果がとくに印象的に打ち出したのは、初期の万博に展示された日本の物産が、それらが開催された欧米諸国において、異国趣味／エキソチシズムを強調する形で受容・消費され、また日本側もそれに呼応する自己表象を重ね、ひいては日本が（西洋）国際社会に入り込もうとする努力は同時に、自らの他者性ないし周縁性を固定化するものであったという文脈であった。これが、日本の万博参加史における注視すべき一側面であったことは間違いないと、筆者も考える。

しかし、この視角は結果として、その後の万博研究に影響力を持ちすぎたのではないか。日本の西洋「文明」社会へのキャッチアップが完成しようとしていた——だからこそ貿易摩擦に苦しんでもいた——1970～80年代、日本の来し方をこのように捉えることが読者に受け入れられやすく、また読んだ者の思考に深く根つきやすかったと推測することも、的外れではないだろう。

その後、万博というテーマは分野を超えて多くの研究者を惹きつけ、万博の持つ種々の側面を取り上げた多くの小規模な研究が重ねられるようになったが、それらは全体として、当初の吉田研究を踏まえ、その視角を再生産したと考えられる。一方で、あらためて万博という事象全般を問い直す研究成果が生まれないうまま、吉田らの成果は万博研究の基本文献であり続けた。万博に対する総合的な視野を持つ数少ない著作を代表するものとしては、1992年に出版された吉見俊哉の『博覧会の政治学』（中央公論社）があり、一般にも注目されたが、万博を欧米列強の帝国主義的「まなざし」を具現化する装置として論じたこの書もやはり、

吉田の「エキゾチズム」文脈を万博研究の常套としてより強固にするものであったと言えよう。

こうして、日本における万博研究は——むろん例外もなかったわけではけっしてないが——ほぼつねに「日本」を主題としてきた。のみならず、やや批判が過ぎることを恐れずに述べるなら、近代国際社会において、受動的な他者であることを強いられた特殊な存在としての日本（文化）という位置づけを予定調和的に導くものとして、積み重ねられてきた。

2. 共同研究会の問題意識

かく言う筆者も、吉田研究の成果に濃厚な影響を受けて万博研究を志向した者であり、上の批判はまず自分自身に向けられなければならない。が、自身の研究の途上でのいくつかの経験から、万博研究を規定してきたとも言えるこの視角に疑問を持つようになった。問題を端的に述べれば、万博で日本文化のエキゾチズムが（不当に）強調されたことそれ自体は間違いではないが、日本だけがそのような目に遭ったかのような論じ方は妥当ではないということである。むろん、一連の吉田書は、より広範な世界にも目を配っている。が、それに続いた個別の研究では、研究規模の制約もあって、当然のように日本だけを見て論じるケースも増えた。それらが、問題は日本「だけ」のものであると特記しているわけではなくとも、考察がその範囲を出る余地がないのなら、実質は同じであろう。

西洋世界における万博で自文化のエキゾチズムが誇張され、消費されるという点において、類似の経験をした非西洋諸国は、他に多く存在する。日本は独自の歴史をたどったのではなく、比較の対象となりうる多くの非西洋諸国の「一例」にすぎない。つねに「多くの非西洋諸国」全体を視野に収める必要まではないが、そうした横の広がりやを考慮したことのないままに論じられる「万博の日本」は、信ぴょう性に欠けると考えるようになった。筆者がそう気づかされた研究経過については、先に触れた共同研究会の成果論集『万国博覧会と人間の歴史』（「はじめに——本書について」）でも触れたので、ここで重ねて紙数を費やすことは控えるが、思い起こせば、2010年度以来の共同研究は、まさにこの問題意識から、万博研究を「やり直す」ために始まったのである。

本稿ではこの問題に関連して、筆者が既存の万博研究においてとくに問題を感じている事柄の一つ付け加えておきたい。1851年のロンドンでその歴史が始まった万国博覧会に日本が初めて参加したのは、1867年のパリ万博というのが通説化しているが、これは誤りである。結果からみれば倒壊直前の段階にあった徳

川幕府は、1867年パリ博に招かれて出品し、將軍徳川慶喜の実弟昭武を団長とする使節団を派遣した。このように万博に公的な代表団を送り込んだのは、たしかにこのときが初めてである。しかし、その前の1862年ロンドン博に、幕府はすでに出品物を送り、イギリス側からも公式参加国として認識されていた（従前よりそのことを正確に述べておられたのは、筆者の知る限り、松村昌家氏のみである）。

このロンドン博が日本の万博参加史から除外されてきた要因は、このときの出品が、ときの駐日イギリス公使ラザフォード・オールコックによって、幕府のあずかり知らないところで勝手に行われたという理解にあると考えられる。初期の研究者が史料不足からそのように推測して述べたものが、調べ直されることのないまま踏襲され、いつのまにか定説となったのであろうが、そもそもこれ自体が間違いであり、オールコックは当時、イギリス政府の駐日代表として、幕府老中に対し本国から日本への参加招請を正式に伝えていた。そして、幕府もその趣旨を理解し、むろん準備の大部分はオールコックに頼りつつも、少ないながら自ら出品を実行した経緯については、やはり先の論集『万国博覧会と人間の歴史』（拙論「万博の人、ラザフォード・オールコック——1851、1862、1878、1886」）で、史料に基づいて明らかにした。

しかし、ここで問題視したいのは、この日本の参加経緯に関する事実誤認のことではない。1862年ロンドン博への参加に幕府が関与したとはいえ、実際、参加を実現するにあたって、オールコックの働きは実に大きかった。実質的に日本部門を演出したのはたしかにオールコックである。それでも、それゆえにこの1862年博を日本の参加史から除外するという考え方には問題があると、筆者は考えている。外国人の意向が主な動因となってなされた出品を、日本の真正な「参加」とは位置づけたくないという「気持ち」は理解できるが、日本の万博参加がそのように、外からの目と手によって、いわば「連れ出される」という形から始まったという事実を無視し、正規の歴史から外してしまうという形をとっては、国際社会における日本の歩みを客観的に振り返ることができないのではないか。

日本の万博とのかかわりは、1862年ロンドン博において、オールコックの主導と幕府の限定的な関与から始まり、67年パリ博には、やはり駐日フランス公使ロッシュの多大な協力のもと、幕府の自主性がかなり向上した形で参加。明治維新をはさんだ1873年ウィーン博の際もなお、お雇い外国人ワグネル、駐日オーストリア公使館員シーボルトの助言に多くを依存したが、同時に、政府の主体的参加と見なしうる形が整った。こうして段階的に外国側の采配から脱し、日本が自立して出品実務を遂行できるようになっていった、その経過全体を、日本の

万博参加史の第一歩として記録することこそが重要であろう。

さて、「初めての万博参加」をめぐる認識のぐらつきについて長々と述べてきたのは、実はこのこと自体が、日本だけに限られた現象ではないからである。たとえば中国は、日本より早く、1851年の世界初の万国博覧会から参加していた。しかし当初の主体性は日本の場合よりも弱く、中国政府は公式にはまったく関心を示さず、事実上、外国側が勝手に出品した。その段階から始まり、洋関——その存在自体、外国の中国政府業務への介入にほかならない——が万博参加実務を担った時代、洋関の監督を脱して主体的な中国政府の参加が実現していく段階にわたって、いずれの万博を中国の初参加の場と見なすかという認識は、研究者によってかなり開きがある。その点では、一つの見方が定説化してしまった日本の場合とは異なると言うべきかもしれないが、自国の主体性の度合いとの関連で「初めて」を判断しようとする視点が共通していることは興味深い。

多くの非西洋諸国にとって、少なくとも19世紀から20世紀前半までの万博への参加史は、近代国際社会への参入の道のりを縮図のように表している。したがって、日本、さらに中国のみならず、いずれの国においても、自国／自文化の参加経緯に関心が集中し、それを中心に研究が進むのは当然のことであろう。しかしそのうえで、視野をその範囲——たとえば日本において、日本に関すること——にとどめず、少なくとも日中両国、そしてもっと大きく広げることで、そこには一国の奮闘物語ではなく、非西洋諸国の近代国際社会への参入過程を把握する、客観的な切り口が見えてくるのではあるまいか。

上に取り上げた「初参加」問題のような研究上の傾向を、仮に自国について批判する場合でも、それを他との比較のなかで相対化し、共通点もあれば相違点もあるさまざまなケースのなかの「一例」として見直すならば、逆にその「一例」が世界史の一角に占めるところとその意義を確かめることができるようになるだろう。ひいてはその研究は、それ自体は深く「一例」を見つめ続けるものであったとしても、その囲いのなかに限定されない、グローバルな価値を持ちうるのではないか。

そのような意味で、万博研究は筆者にとって、「日本研究」（それ自体を相対化するために、「一国研究」と言い換えてもよい）という、日教研という場において根本的な研究枠組みへのチャレンジを内包するようになった。または、あえて極言するなら、そのチャレンジの側から見た場合、万博研究はそのための一つのツールということになるかもしれない。

3. 共同研究会に表れた方向性

共同研究会のメンバーは必ずしも「日本研究」というものに関心を持って集った方々ではないので、つねにこのような問題意識を表向きに論じてきたわけではない。が、万博の研究を従来の日本中心的な視野から解放し、日本の位置を相対化していこうという狙いは、当初から明確に打ち出し、研究会として共有してきた。そして、とくに初期の研究会での議論から、まず、世界中というよりは近隣アジア諸国の歴史的経験を意識的に研究に取り込むという形で、その第一歩を具体化しようとしてきた。

そのことは、本稿冒頭に掲げた各段階の研究会名にも表れている。2015年秋に刊行した成果論集のタイトルを単に『万国博覧会と人間の歴史』とし、現行の新研究会名はそのままこれを踏襲して、「アジア」を付さなかったのは、そこまでの積み重ねから、アジア以外の非西洋諸国にも共同研究の視野が広がり、そうした広範な地域の研究者とネットワークを構築していく可能性が見えてきたからである。とはいえ、アジアを重視する姿勢は今後とも変わらない。

さて、このように、日本という対象を相対化することから新たな万博研究をめざすという方向性は、大きく三つの形で、研究会の展開に表れてきたと言うことができる。

一つは、一人の研究者が自身の視野を広げ、多角的な研究を試みるケースで、典型的には当研究会の創立メンバーの一人である鶴飼敦子さん（東京大学東洋文化研究所・日本学術振興会特別研究員）の研究が挙げられる。鶴飼さんは美術史と日仏交渉史にまたがる領域で、いわゆるジャポニズムを専門とされてきた研究者である。

ジャポニズム研究と万博研究は、従来から深いかわりがある。19世紀後半からヨーロッパ各国を席卷したジャポニズムの源が万博の日本出品物に求められることは周知のとおりだが、その意味でジャポニズム研究者にとっては必然的に、万博は重要な研究の素材ないし舞台となってきた。逆に、日本の万博研究はジャポニズムという現象とあまりに深く結びついてきたと言うこともでき、その内容は、先に述べた吉田研究の持つ傾向とも無関係ではない。

鶴飼さんが当研究会の初期の議論のなかで、ジャポニズム——「日本」趣味——という枠で自らの研究を規定することに疑問を抱くようになっていった様子を近くで拝見していて、筆者は大きな刺激を受け、また励まされる思いでもあった。鶴飼さんはその後、歴史上の万博におけるアジア諸国の展示物が、われわれ

の想像よりはずっと混交的に受容されたかもしれない可能性や、「日本の」「中国の」と称される物産が元をたどれば、素材や意匠の地球大の交流・商取引のなかでつくり上げられてきたものであることに着目し、ご自身の研究を「世界美術史」と呼び直して、新しい道を開く挑戦を続けておられる。論集『万国博覧会と人間の歴史』には、そうした方向性のなかで金唐革／金唐紙という製品を取り上げた一つの試みを、「万国博覧会を飾った日本の革と紙——ジャポニズムを越えて」として寄稿された。

他方、共同研究会の活動において、必ずしも全員が、鶴飼さんのように個人研究の枠を具体的な形で広げることを旨としてきたわけではない。むしろ個々の研究者が、あくまで自身の専門とする日本の問題、中国の問題……を深めながら、それを世界史のなかの「一例」として相対化すること、そのためには何よりも、互いの別な「一例」に関心を持つことを通じて、各々の研究の意義を考え直すことをめざしてきた。そのために重要なのは、研究会のなかにさまざまな「一例」を確保することであり、またその結果として、研究会全体としての枠も広がっていくことになる。すでに述べたように、ここまでの活動では近隣アジア諸国を中心に、それを実現しようとしてきた。

論集『万国博覧会と人間の歴史』では、日本以外のアジア諸国の経験を取り上げた論考が全体の約三分の一を占め、まだ必ずしも十分ではないにせよ、万博研究のあり方として新しい方向を打ち出すことができたと考えている。このなかには、中国や韓国などの現地側の研究者によるものと、日本人またはそれ以外の外国人研究者が、中国や韓国のケースを取り上げた論文が含まれる。

一つ一つが本研究会の誇る貴重な成果だが、ここではとくに、ユク・ヨンスさん（韓国・中央大学校人文学部教授）の論考「『隠者の国』朝鮮士大夫のアメリカ文明見聞録——出品事務大員鄭敬源と1893年シカゴ・コロンビア万国博覧会」に触れておきたい。朝鮮はこの1893年シカゴ博に「初めて」参加した。鄭敬源はこのとき、朝鮮政府の代表を務め、現地に渡った官僚である。ユクさんの論文は、鄭敬源という個人に着目し、本人が残した「鄭敬源文書」——19世紀万国博覧会をじかに経験した朝鮮人の手になる記録のうち、公開された唯一の史料であるという——を紐解きながら、万博参加の経緯を中心に、彼の西洋文明理解の進展を追跡し、批評する。

いまその内容の詳細に踏み込むことはしないが、岩倉使節団の『米欧回覧実記』をはじめ、幕末から明治にかけて、幕府や政府に派遣されて、または個人留学生として洋行した日本人の記録に魅せられたことのある読者ならば、まず、比較の

おもしろさに膝を打つであろう。遡ってユクさんと寄稿内容を相談していた折、「朝鮮の福沢諭吉」として言及されたこの人物について、このような紹介がなされたことは、万博研究から生まれた東アジア比較文化研究の大きな前進であり、同時に万博研究の枠を豊かに広げてくれたとすることができる。

三つめに、以上のようなアジアへの視野の拡大という方向性とは異なるが、これからの万博研究にとってきわめて重要と考えられる切り口が、本共同研究会を母体に2015年12月に開催した国際研究集会「万国博覧会と人間の歴史」において、招待発表者の一人、ロバート・ヘリヤーさん（米国・ウェイクフォレスト大学歴史学部准教授）から示されたことを記しておきたい。「闘うティールーム——万博を舞台に、アメリカ市場を狙って繰り上げられた日英競争1893-1917」と題する研究発表でヘリヤーさんは、タイトルのおおりに、この時代の一連の万博が茶貿易の伸展をめぐる日英間の熾烈な競争の場となった事実を、史料を踏まえて具体的に明るみに出した。

ここで提示されたのは、万国博覧会という場に、従来描かれ続けてきたエキゾチシズムともジャポニズムとも異なる、能動的な競争者として登場していた日本の姿である。その意味においてこの発表は、「万博における日本」の研究を鮮やかに更新するものであった。ヘリヤーさんはもともと日本の茶の輸出を世界大の貿易の動きのなかに相対化してみせたことで注目を集めた日本史家だが、その研究の過程で、茶貿易の推移を分析するうえでの万博という舞台の重要性に気づいたという。たとえばこのような視角から、あくまで日本という「一例」を掘り下げながら、従来の日本研究の枠をも万博研究の枠をも打ち破る研究が生まれつつある。

4. これからの日本研究のために

ここに書いてきたことは、万博研究と日本研究に関する網羅的な考察とは到底言えない。しかし、既存の万博研究を踏まえて当共同研究会が模索する方向性が、「日本研究」という、わざわざそう称する以上もともと国際的な前提に立っているはずが、実のところ「一国」主義的な視野に陥りやすい営みの抱える悩みを多分に映し出しているということは、お伝えできたのではないかと思う。

むろん、当研究会のテーマは万博であって、万博そのものにより密着した研究上の特長——歴史上のものだけでなく現代の最新の万博までを連続的に取り扱う研究姿勢や、そうした現在進行形の万博の企画現場で働く専門家たちとの連携を重視することなど——を挙げることもできる。「日本研究を脱する」実験のみを

念頭に置いているわけではない。したがって、本稿の内容は研究会のあくまで一つの側面であることはお断りしておかなければならないが、万博研究につきまわっていた日本中心的な視点を相対化し、仮に対象を日本の事例に絞り込んで深く追求するにしても、それをあらためて普遍的な意義を持った研究として築き直すという意識は、やはり当研究会の拠って立つ基軸である。そのことが、共同研究会メンバーはもとより、研究会としてのおつき合いが生まれた方々の間で、徐々に広く理解されつつあることを実感している。

そうしたなかで、いま一步、チャレンジしなければならないことがある。ここで近隣アジア諸国の視点を取り込んだ日本の相対化とか、グローバルな研究とかと謳いながら、あくまでそれを日本で、ほとんどの場合は日本語で行う研究会で追求し、日本で刊行される日本語出版物で表現しているにすぎないという実態は、まことに歯がゆい。今後、より実質的な、真の相対化へと踏み込むためには、研究会自体もアジア各地で、現地の研究者らを巻き込みながら行い、成果物の公表も各国語でできることが理想である。これには当然、一定の資金も必要であって簡単に実現できることではないが、可能なことから着手していきたいと考えている。

本研究会ではこれまでも、2010年上海や2012年麗水（韓国）、2015年ミラノと、開催中の万博を訪問する自由参加の視察旅行を実施してきた。しかし、これをもう一段階進める最初の試みとして、2016年11月に初めて、ソウルでのシンポジウム開催を予定している。こうした国外での研究会は、日文研の通常の共同研究制度では残念ながら許されていない——つまりこのような本質的な「相対化」を目下の制度はめざしていない——のだが、ゆえに、あくまで共同研究会をベースとした「番外編」企画として、メンバー中の有志に各自の費用で集まっていたくという計画である。

研究会の海外メンバーであるウィーベ・カウテルトさん（ソウル大学校環境大学院教授）が中心となり、先に触れたユク・ヨンスさんが協力する形で準備を進めてくださっており、そこに日本からのメンバーが参加して、現地で新しく招かれる韓国人研究者らと議論することになっている。何よりもこのことの意義に共鳴して手弁当で奔走して下さっている現地のお二人に、そして日本から呼応して下さるメンバーに感謝するとともに、この機運を大切に、次につなげていきたいと思う。ここから得られるものは、仮に現行の日文研の制度をはみ出しても、これからの「日本研究」の、より大きな可能性に還元されていくものであると考えている。

本稿を書いているのは2016年8月だが、本誌が刊行されるころには、ソウルでのシンポジウムはすでに完了していることであろう。翌年は中国のどこかで、と念じている。まさに万国博覧会のように、研究会が世界各地を——いずれはアジア以外の非西洋諸国や欧米も含めて——回り、互いの「相対化」に寄与していくことができたなら、万博研究の面目躍如といったところである。